

方法の記憶——茶室に潜む日本文化

内田 繁

茶室に壁が誕生したのは一五八二—一八四（天正十—十二）年頃とされている。利休の「待庵」がその最初である。茶の湯の想いを深めていった結果が壁の出現であろう。だが壁の出現は、日本の建築空間にとって、とてつもない事件であった、というと驚くであろう。

日本の建築は、元来、壁のない建築である。屋根と柱と床しかない。建物と部屋との間に建具を入れ、その建具を取り払うとすべてが開放される。部屋と部屋との間仕切りも同様で、襖、障子など、きわめて簡単なもので仕切られている。こうした風土の建築は、モンスーン型気候ゆえに風通しの良い空間が求められ、部屋を仕切れることを息苦しく感じるという感覚が影響している。

だが一方で、四本の柱を注連縄で結ぶことによって、カミの領域とヒモロギが生まれるというように、空間を認識にとらえる思想態度が、固定化された壁をきらいともいえるのである。さらに、日本人の死生観にともなう「いま」という概念は、固定化されたものよりも仮設性を重視し、瞬時につくられ、瞬時に消えるような空間に、神聖さを感じる。こうした風土の建築概念、形態を裏切るように生まれたのが、壁に閉ざされた空間「茶室」であった。それは壁の存在だけで、非日常空間を表していた。

こうした壁の空間の出現は、それ以前の空間表現とはことごとく異なるものであった。たとえば、垣・門・闕などの装置によって、聖とケガレを分離した空間概念、襖・障子・格子など連続した空間でありながらも空間分割を果たした空間観、沓脱石を境として坐の空間とそうでないものを分離した床の存在など……。こうした空間表現は、すべて

認識的なものであり、いわば、呪術的世界が色濃く反映された、習俗のタブーが仮構された世界でもあった。

だが「茶室」における壁の出現、小間の出現は、壁という実態を通して意識的世界を生み出したのである。私はこの壁の出現を機に、日本人の空間観が新たな展開を示しはじめたと考えている。

そもそも侘び茶以来の「茶室」は一般に「数寄屋」とも「草庵」ともよばれる、質素な建築をいった。数寄屋は空の家と書いて「空き屋」ともいう。日本の室内の特性は「空なる場」である。その空なる室内にさまざまな道具を置いて、自由な変化をつくりだす。「空なる場」は何の特性もない無の空間なので、そこを必要に応じてさまざまに変化させ、「時」と「場」をつくりだす。だからこそ「一座建立」であり、「一期一会」なのである。日本の思想は「変化こそ永遠である」と考えられ、固定化された融通のきかないものには自在性がなく、それは死に等しいととらえる思考であった。この空間の自由な変化こそ「茶室」の本質であると、私は考えている。

私のデザインした三つの茶室《受庵 想庵 行庵》「図1、2」は壁に閉ざされた茶室ではなく、認識的な空間を意図したものである。壁に囲まれることが主である今日の建築は、物理的な空間だといえよう。



図1 内田繁《受庵 想庵 行庵》1993年 内田デザイン研究所蔵 撮影：Nacása & Partners Inc.



図2 内田繁《行庵》の内部空間 1993年 内田デザイン研究所蔵 撮影：浅川敬

そうしたなかで、認識的世界がどのように感じられるか確かめたものである。

また、私が茶室について考えようと思った理由は、西洋社会の空間と日本の空間との間に大きな隔たりを感じていたからである。それは、どちらが優れているかなどと競い合うような問題ではなく、これほど情報がなされた今日社会においても、ヨーロッパのデザイナーが生まれ出すものと私たち日本人デザイナーの創り出すものとの間に微妙な差異が生まれるのはなぜか、という疑問から発したものであった。

世界は、現代という点においては、共通した問題を抱えているといえるだろう。本来、デザインはそうした課題の解決手段の一端を担うものであるが、もし、そこに表現の違いが生まれるとしたならば、それは、日本には日本人の、イタリアにはイタリア人の持つ空間感覚の微妙な違いによるものではないだろうかとおもう。その空間感覚とは、とりもなおさず、生活文化の違いによって生まれるものだと考えている。

日本の文化を考えるうえで、際立った特性を見るのは「坐る文化」と「沓脱ぎの文化」だといえる。床に静かに坐ること、「精神を安定させ、深い思考を生み出す」といった身体感覚が日本人に坐る文化を生み出した。また、日本人は古来から、家を「聖なる空間」と考えてきた。聖なる床に上がるためには、履物を脱ぐ。こうした行為もまた、日本文化に深い影響を与えてきた。

では、家とは何か。

一般に、家とは自然から人間のための空間を切り取り、囲ったものである。では、日本人にとって、家とは一体何を切り取り、囲ったものなのだろうか。このことが「沓脱ぎの文化」を考えるうえで重要であり、日本の家とは何かを示唆している。

普通、家とは、防衛を目的につくられたものだと考えられている。雨、風、寒さなどをしのぎ、ときには外部の侵入者を防ぐようなものをいう。一方、ガストン・バジュールは、「家は肉体と魂である」「家は家を中心とした家族の絆をつくるためのもの」、そして、「家がなかったら人間は散在した存在になるだろう」ともいった。こうした見方は、今日の住居観をよく表しているが、古来日本の家は、もう少し異なった発想から始まったものであった。

原始社会の「囲む」というイメージについて、ミルチャ・エリアーデは「閉ざされた外側に展開される未知の見えない世界から身を守る」というコスモロジーに由来するという。日本の家は、まさに見えない世界の悪霊、怨霊、死などのケガレから守るものなのである。

そう考えると、日本の家は、未知の自然から聖なる空間を囲ったものである。聖と俗、コスモスとカオス、彼岸と此岸、この世とあの世など、空間を二つの世界に分離し、未知の世界との結界を設けたものが家である。「沓脱ぎ」とは、聖なる世界へ越境するための儀礼を表したものである。

日本の固有風土ともいえる「坐る文化」「沓脱ぎの文化」が生み出した身体感覚は、きわめて微細なものに目を向ける感覚であった。森林に覆われた風土の民が、じつと大地に坐って自然を観察し、連想し、類推するという態度は、微妙な出来事にも注意を払う姿勢である。そして、微細なものなかに秘められた美を発見する姿勢でもある。そうした感覚は、そのまま日本の空間デザインに反映されてきた。「非構造的な空間」「坐して眺める姿勢から生まれた水平感覚」「仮設性」「AともBともつかない中間領域の創造」などの建築的態度は、坐る固有の微細な感覚によるものである。

私が茶室をつくり続けるのは、そうした「坐る文化」「沓脱ぎの文化」が集約されたものが、そこに表れているからにはかならない。そしてそこには、近代が無視しつづけた地域、民族の固有文化について改めて見据えるという視点が立ち現れるのだ。

(インテリア・デザイナー)